第1章　横浜市子ども読書活動推進計画策定の趣旨

1　子どもたちにとって読書活動とは何か

（1）読書の過程と読書活動

読書という行為の過程を具体的にたどってみると、次のようになります。

文章を読む〔あわせて、さし絵や図等を見る〕
→ことがらの内容を把握する（イメージを描く）
→ことがらの内容を理解する（論理的に受けとめる）
→ことがらを既に知っている知識や認識に引き寄せ解釈する
→ことがらを新しい知識や認識としてたくわえる
→ことがらの内容についてより深く考える
→ことがらをきっかけとして未知の世界を想像する・・・

読書活動とは、**こうした読書の過程を積み重ねることによって、読み手自身が内面的に変化し、成長していくことを目的とした、主体的な活動である、**ということができます。

読書活動の推進とは、そうした変化・成長が効果的に行われるための、広い意味での環境整備や、支援活動をさします。

（2）読書活動から得られるもの

読書は、第一に、自分自身の内面を豊かにする行為です。

読み手は、読書を通じて新しい言葉を学び、言葉を通じてものごとに対する感覚を磨き、自分の知らなかった多様な世界を知って、想像力や創造力を豊かにしていきます。こうした過程は、子どもにとっては特に新鮮な経験として積み重ねられていきます。

また、読書は、自分自身と対話することでもあり、そのことを通じて、子どもは、じっくりと落ち着いて考えを深める習慣を身に付け、思考力を高めていくことができます。こうした経験が、自ら考える力を付け、課題を発見する力や、判断力を養うことにつながります。

さらに、物語等に登場する人物や動物に感情移入することで、子どもは、情操、思いやり、生命を尊ぶ心をはぐくんでいきます。

これらは、生涯にわたって学び、身に付けていくべき、教養・価値観・感性など、すべての人間的活動の基礎となる重要な要素です。

読書は、第二に、先人の知恵に学び、著者と対話してそのメッセージを受けとめるとともに、外に向けて自分の考えを発信する力を養います。

言葉を通じてあることがらを理解する力や、自分の考えを表現する力を養うことは、他者とのコミュニケーション能力を高めることにつながります。これは、子どもが社会性を身に付けていく上で非常に大切な要素です。

また、様々な情報を受けとめ、主体的に取捨選択する能力も、多くの本を読むことを通じて磨かれていきます。

このように読書は、理解力や表現力等、人間にとってすべての社会的活動の基礎となる力を、効果的に高めることができるものであると言えます。

【読書と社会性】

本との出会いは様々ですが、乳幼児期には、読み聞かせ等によって、大人が選択した本を一方的に与えられる場合が多いと考えられます。しかし、学齢期になると、子どもの多くは、本を選択するための情報を、教職員や友達から得るようになります。

子どもが本をよく読むようになるための条件は、身近に本があることと、子どもと本をつなぐ「人」が存在していることの２つだといわれます。逆に、本を仲立ちとして対話が交わされ、人と人とがつながる場合もあります。

読書は、自己教育の中心としての役割を果たすだけでなく、コミュニケーションの有効な手段でもあり、先進的な取組の例として、読書を活用したコミュニケーション教育を実践し、効果を上げている学校もあります。

本は、それを媒介として社会性を養う手段としても、有効なのです。

（３）なぜ、子どもにとって読書が大切か

これまで述べたように、読書は、人生をより深く、より生き生きと生きるための力を育てる大切な手段です。

もちろん、こうした力を養うことは、子ども時代にのみ必要なわけではありません。乳幼児期、学童期、青年期、そして成人期、成熟期と、人生の各段階において、生きる力や豊かな感性を持ち続けるために、必要な読書環境が用意されていることが、望ましいと言えます。

さらに言えば、子どもの読書活動の推進にあたっては、豊かな読書経験を経て読書の喜びを知り、それを子どもたちに伝えようとすることのできる、身近な大人の存在が、非常に大切なのです。

しかし、子どもの読書、とりわけ学童期や青年期前期（中学・高校生くらいまで）における読書が特に意味を持つのは、読書等によって得た言葉への

興味が、その子どもの言語能力の向上に効果的に結び付くとともに、コミュニケーション能力の基礎がはぐくまれるのが、まさにこの時期であると言われているからです。

また、学童期～青年期前期の子どもに対しては、組織的・計画的に行われる学校の教育課程に読書活動を組み込むことで、理想的な読書環境づくりがしやすい、という利点も考えられます。

青年期前期までに適切な読書の習慣を身に付け、乳幼児期の「与えられる読書」から「主体的な読書」への円滑な移行と習慣付けを行うことが、子どもの読書活動にとって、大切なことであると言えます。

２　横浜市子ども読書活動推進計画の概要

横浜市子ども読書活動推進計画は、横浜の子どもたちが、あらゆる機会や場所をとらえて、主体的に読書に親しむ習慣を身に付けられるような環境づくりを進めることを目的とし、そのために必要な施策について示すとともに、その効果的な実施に向けての計画を明らかにするものです。

（１）計画の位置付け等

この計画は、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第４条及び第９条第２項に基づき、国の基本計画及び神奈川県の推進計画を基本としつつ、横浜市における子どもの読書活動の推進に関する取組の方向性や施策について述べたものです。

策定にあたっての基本的な課題認識は、次の４点です。

ア　学校図書館の充実と活性化
イ　子どもの読書に関わる各機関や、民間団体等との連携の促進
ウ　学校・家庭・地域のそれぞれの場で必要な取組の充実
エ　子ども読書活動推進のための普及啓発

これらの基本的な課題について、学校現場の現状やアンケート調査等から導き出されるデータにより、問題点をさらに具体化していき、読書活動推進のための方策を導き出すこととしました。

（２）計画の対象

この計画は、０歳から概ね18歳までの子どもを対象として想定しています。

（３）計画推進の主体

子ども読書活動の推進主体は、行政はもちろん、企業、団体、市民等、子

どもの読書活動に関わるあらゆる人々や機関等を想定しています。行政は、各主体の取組がより効果的に進められるための環境整備や、支援等を行っていきます。

（４）計画推進の期間等

この計画では、おおむね平成 18 年度から 22 年度までの 5 年間にわたる、横浜市の子どもを対象にした、各主体における読書活動推進の方向性と、行政としての施策の具体例を示しています。

なお、5 年後の目標については、一応の目安として示しましたが、**実施体制や年次目標の具体化は、原則として実施主体ごとに検討する**ものとします。

（５）計画の構成

この計画では、第 1 章で基本理念や計画の概要を述べ、第 2 章で子どもをめぐる読書の現状について概観します。そして、第 3 章での目標確認・課題整理を踏まえて、第 4 章では子どもの発達段階に即した読書活動推進の基本的考え方と施策例を示しています。

（６）計画推進にあたっての視点

この計画では、第一に「**学校図書館の活性化**」という点を特に重視しています。そして、第二に「**市立図書館など、関係機関等の連携**」という点に重きを置いています。これらは、子どもの読書活動推進の上で、相互に密接にかかわりあっている課題です。

さらに、乳幼児期に読書に対して最初の興味を持ち、学童期前後に読書習慣が身に付いたあと、卒業後も図書館等の利用によって、一生を通じた読書の喜びが得られるようにするための環境の充実という点にも留意しています。

そして、読書活動を通じた人と人との出会いや、ふれ合いによってもたらされるものが、子どもたちや、これにかかわる大人たちの心を一層豊かにし、生き生きとした生活や、地域の交流を深めることにつながるような「社会教育的な効果」をも期待し、地域での人材育成や、異世代交流という視点も取り入れるようにしました。

＊主な参考文献

『新読書指導事典』阪本一郎・他編、第一法規出版、1981 年
『読書と豊かな人間性の育成』天道佐津子・編著、青弓社、2005 年
『改訂版　読書と豊かな人間性』増田信一・朝比奈大作・米谷茂則著、放送大学教育振興会、2004 年